同一性条件から得られる帰結の探求

齋藤章吾

1. 導入

本研究の目的は省略に課せられる同一性条件から得られる帰結を考察することである。特に、本研究では、以下の 2 つの条件を仮定し、その帰結について示す。

(1) Subset Condition on Ellipsis (cf. Murphy (2016))
省略箇所の形態統語素性は先行詞の形態統語素性の部分集合でなければならない。

(2) 構造の同一性 (cf. Saab (2022))
先行詞と省略箇所は同じラベルの構造を持たなければならない。

これらは、省略箇所が先行詞に存在しない素性や構造関係を有することを禁じる条件である。なお、Aelbrecht (2010) などの近年の研究に基づくと、省略の標示は統語部門で起こると考えられることから、本研究では上記の条件が統語部門で評価されると仮定する。これらの仮定は、先行詞と省略箇所の間に厳しい統語的同一性を求める一方、条件に抵触しない範囲で不一致を許すことを予測する。本研究では、先行詞と省略箇所の間に不一致が見られる事実をいくつか取り上げ、それらに説明を与える。

2. ゆるい同一性/Vehicle Change

省略箇所が代用形を含む場合、先行詞と省略箇所の間で不一致が生じ得る。(3)は、先行詞と省略箇所が異なる代名詞を含んでいても省略が許されることを示唆する。 (先行詞を太字、省略要素を山括弧で示す。)

(3) John **likes his teacher**, and Mary does <like her teacher>.

この事実は、束縛代名詞が値未付与の φ 素性を伴って派生に導入され (cf. Grano and Lasnik (2018))、形態音韻部門の一致を通して φ 素性の値を得る (cf. Bobaljik (2008)) と仮定すると、同一性条件の評価のタイミングに関する仮定と併せて説明可能である。具体的には、(3)の代名詞の素性の違いが形態音韻部門の一致により生じるものであり、統語部門において 2 つの束縛代名詞はどちらも φ 素性と格素性の値を持たない同一の要素 (pronoun[φ: __][Case: __]) であると仮定することで、同一性条件に抵触しないと説明される。

続いて、(4a, b)は、先行詞が照応形や指示表現を、省略箇所がそれらと同一指示の代名詞を含む文が容認されることを示唆している。一方、このような不一致は、省略箇所が照応形を含む(4c, d)では容認されない。

(4) a. Max$_i$ **hit himself$_i$** before Oscar did <hit him$_i$>. (Fiengo and May (1994: 206))
b. Mary **introduced John$_i$ to everyone** that he$_i$ wanted her to <introduce him$_i$ to>. (ibid.: 275)
c. *John likes Mary$_i$ and she$_i$ does <like herself$_i$>, too. (Salzmann (2019: 193))
d. *John likes her$_i$ and she$_i$ does <like herself$_i$>, too. (adapted from Salzmann (2019: 193))

この事実は、Abels (2022)に従い、各 DP 表現の構造を以下のように仮定することで説明される。

(5) a. 指示表現 [$_{DP}$ D NP]　b. 代名詞 [$_{DP}$ D(pronoun)]　c. 照応形 [$_{DP}$ [$_{DP}$ D(pronoun)] [$_{XP}$ self]]

(5)によると、代名詞は他の表現の部分集合的な構造を持つが、照応形はそうではない。その結果、省略箇所が先行詞の部分集合的要素のみで構成される(4a, b)は許されるが、省略箇所が先行詞に無い要素を含む(4c, d)は許されない。この分析は、代動詞にも拡張できる可能性がある。この点について(6)をもとに説明する。

(6) I'll **help you** if you **want me to** <help you>. I'll **kiss you** even if you don't <want me to kiss you>

(6)の 2 文目は、省略箇所が完全に同一の先行詞を持たないが、文法的である。これは通常の VP の部分集合的要素で構成される代動詞が[$_{VP}$ kiss you]の部分に挿入されていると仮定することで説明できる可能性がある。

3. 付加詞の欠落

先行詞に含まれる付加詞が、省略箇所で欠落しても許される例が存在する。

(7) a. ?**John is probably running late**, although I don't know why <he is (*probably) running late>. (Thoms (2013: 562))
b. ?John **plans to study abroad next year**, and Mary does <plan to study abroad (*next year)> too though she hasn't decided when she will <study abroad>.

(7)の省略箇所は先行詞の部分集合で構成されるため、(1)には抵触しない。また、付加がラベル情報を変化させない (cf. Chomsky (2004)) と仮定すると、付加詞の欠落はラベルの同一性条件にも抵触しない。このことから、付加詞の欠落による不一致が可能である事実は(1, 2)の条件の帰結として説明可能である。

4. 移動体と省略の関係

省略箇所から抜き出される要素は先行詞と一致していなくても良いことが観察されている。(8a)は、先行詞に対応物を持たない要素 (of who) が省略箇所から抜き出される例で文法的である。一方、(8b)は、先行詞に対応物を持たない要素の一部 (of) が残留する例で非文法的である。

(8) a. **They are jealous**, but it's unclear [of who]$_i$ <they are jealous t$_i$>. (Chung (2006: 80))
b. ***They are jealous**, but it's unclear who$_i$ <they are jealous of t$_i$ >. (ibid.: 79)

この事実は、移動体が複数のコピーで構成される不連続要素としての統語体であると仮定すると、同一性条件に関する仮定と併せて説明可能である。(1, 2)の条件が移動体に統語的同一性を求めるのは、移動体全体(コピー全て) が省略された場合のみである (cf. Abels (2022)) と仮定すると、(8a)では先行詞に対応物を持たない移動要素全体が同一性条件の対象外であるため文法的となるが、(8b)では残留要素が同一性条件の対象となるため非文法的となる。

5. 助動詞等に関する不一致

省略の種類に応じて、助動詞等の一致に関する振る舞いが異なることが観察されている。動詞句省略では、助動詞の定性の不一致が制限される一方、非定形助動詞の形態の不一致が許される。

(9) a. * I **am confused about ellipsis** and you will <be confused about ellipsis> too. (Potsdam (1997: 353))
b. John is **being examined** but Jack really should <be examined> also. (ibid.:360)

この事実は、定性の違いが be 動詞の内在的素性 ((non-)T 素性と仮定) の違いによって生じ、かつ、非定形助動詞の形態の違いが屈折素性の一致によって生じる (cf. Bjorkman (2011)) と仮定することで説明可能である。(10)に(9)の分析を示す。 (be 動詞は Asp/Voice 主要部の具現形で、定形助動詞の場合 T へと主要部移動すると仮定する。)

(10) a. 先行詞： [$_{TP}$ I T[*i*INFL: PRES]-Voice**[T]**[*i*INFL: PASS][*u*INFL: __] …
[$_{VoiceP}$ Voice**[T]**[*i*INFL: PASS][*u*INFL: __] [$_{VP}$ confuse …]]]
省略箇所： [$_{TP}$ you T-will[*i*INFL: INF] …
<[$_{VoiceP}$ Voice**[nonT]**[*i*INFL:PASS][*u*INFL: __] [$_{VP}$ confuse …]]>]
b. 先行詞： [$_{TP}$ John T[*i*INFL: PRES] … [$_{AspP}$ Asp[T][*i*INFL: PROG][*u*INFL: __]
[$_{VoiceP}$ Voice**[nonT]**[*i*INFL: PASS][*u*INFL: __] [$_{VP}$ examine …]]]
省略箇所： [$_{TP}$ Jack T-should[*i*INFL: INF] …
<[$_{VoiceP}$ Voice**[nonT]**[*i*INFL: PASS][*u*INFL: __] [$_{VP}$ examine …]]>]

(9a)の定性の不一致は、その原因となる内在的(non-)T 素性の違いが統語的同一性条件に抵触するため、容認されないと分析される。そして、(9b)の非定形助動詞の形態の不一致は、形態音韻部門の一致によって形態の違いが生じる前、統語部門において非定形助動詞の同一性が評価されるため (かつ、一致が起こる前において非定形助動詞は統語的に同一であるため) 、容認されると分析される。

一方、Sluicing 等では、先行詞と省略箇所の間で VoiceP より高い位置に生起する要素の不一致が許される。以下の例では、省略箇所が先行詞と異なる要素を含むが、いずれも文法的である。

(11) a. **Sally cooks** every night; she learned how <to cook> from her father. (Rudin (2019: 266))
b. **Your favorite plant is alive**, but you can never be sure for how long <your favorite plant will be alive>. (ibid.)

本研究では、Sluicing で VoiceP より高い位置の不一致が許される場合、不一致を含む部分は素性を持っておらず、その部分の解釈は文脈から復元されると仮定する。この仮定のもと、(11a)は以下のように分析される。

(12) 先行詞： [$_{TP}$ Sally[φ:3SG,FEM] T[Tense:PRES][INFL:PRES] [$_{VoiceP}$ Sally Voice …]]
省略箇所： < [$_{TP}$ DP[φ: __] T[Tense:__][INFL:__] [$_{VoiceP}$ DP Voice …]>]

この構造において省略箇所は先行詞の部分集合的要素で構成されているため、Sluicing で VoiceP より高い位置の不一致が許される事実は(1, 2)の条件に整合する形で説明可能である。本研究では、素性を伴わず文脈のみから解釈を復元できるのは、計算の候補が少ない closed class の範囲のみであるという制限を仮定し、上記のような派生が限定的であると分析する。

*本研究は JSPS 科研費 JP21K13026 の助成を受けている。

<参考文献>**Abels, Klaus** (2022) “On Vehicle Change and Ellipsis Identity,” ms., UCL. **Aelbrecht, Lobke** (2010) *Syntactic Licensing of Ellipsis*, John Benjamins, Amsterdam. **Bjorkman, Bronwyn Alma Moore** (2011) *BE-ing Default: The Morphosyntax of Auxiliaries*, Doctoral dissertation, MIT. **Bobaljik, Jonathan David** (2008) “Where”s Phi? Agreement as a Postsyntactic Operation,” *Phi Theory: Phi-Features Across Modules and Interfaces*, ed. by Daniel Harbour, David Adger, and Susana Béja, 295-328, Oxford University Press, Oxford. **Chomsky, Noam** (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford. **Chung, Sandra** (2006) “Sluicing and the Lexicon: The Point of No Return,” *Proceedings of the Thirty-First Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, ed. by Rebecca Cover and Yuni Kim, 73-91, Berkeley, Calif.: Department of Linguistics, UC Berkeley. **Fiengo, Robert and Robert May** (1094) *Indices and Identity*, MIT Press, Cambridge, MA. **Grano, Thomas and Howard Lasnik** (2019) “How to Neutralize a Finite Clause Boundary: Phase Theory and the Grammar of Bound Pronouns,” *Linguistic Inquiry* 49, 465-499. **Murphy, Andrew** (2016) “Subset Relations in Ellipsis Licensing,” *Glossa* 44, 1-34. **Potsdam, Eric** (1997) “English Verbal Morphology and VP Ellipsis,” *NELS* 27, 353-368. **Rudin, Deniz (2019)** “Head-Based Syntactic Identity in Sluicing,” *Linguistic Inquiry* 50, 253-283. **Saab, Andrés** (2022) “Grammatical Silences from Syntax to Morphology: A Model for the Timing of Ellipsis,” *The Derivational Timing of Ellipsis*, ed. by Güliz Güneş and Anikó Lipták, 170-224, Oxford University Press, New York. **Salzmann, Martin** (2019) “A New Version of the Matching Analysis of Relative Clauses,” *Reconstruction Effects in Relative Clauses*, ed. by Manfred Krifka and Matthias Schenner, 187-224, De Gruyter, Berlin. **Thoms, Gary** (2013) “Lexical Mismatches in Ellipsis and the Identity Condition,” *NELS* 42, 559-572.